

丸山尚士様、

前略

ヴェーバー「宗教社会学」章（『経済と社会』「旧稿」中）の解説注付き全訳を、添付してお送りします。

この邦訳稿は、小生がかなり以前、自分の研究用に訳出し、手許に置いて、隨時参照してきた私家版です。これを、貴兄の「オープン翻訳」に、その趣旨に協賛する一客員訳者の寄稿として、『中世合名・合資会社史』などに並べ、それらに準ずる形で、掲載していただけないか、というお願いです。

*

趣旨は、こうです。

このたび『マックス・ヴェーバー研究総括』をようやく脱稿して、姉妹篇『東大闘争総括』ともども、双方にまたがる基調と問題提起群について、いわば「総括の総括」を試みました。そうしますと、そこからは、つぎの限界がはっきり見えてきたのです。

小生は、『総括』二著で、①「ごく当たり前のこと」が、大学現場や学界で、なおざりにされている実態を、事実と理非曲直に即して具体的に指摘し、論証してきたつもりです。その側面については、近く刊行される季刊『未来』夏期号に、「『ごく当たり前のこと』が、……」と題する小文を寄稿しましたので、後便でお送りします。

ところが、二著では、そういう否定的な実態を衝く「否定的批判」が、ほとんどすべてを占め、② それらの「核心」にある「肯

ゲジンヌンク
定的 心 意」を前面に取り出し、その実現－展開に向けて、新しい企画や制度改革に積極的に取り組む、という方向には、（「公開自主講座『人間社会論』」の実施を除いて）ほとんど踏み出せず、したがって、③ その側面における賛同者ないし批判的継承者は、（弁護士となって「情報公開法」「公文書管理法」の制定に寄与し、「知る権利」の法制的保障、したがって「論証民主主義」の番人として活躍している）三宅弘氏ほか、ごくわずかを数えるにすぎない、という事実が、明らかになってきました。

*

ところで、今回の『マックス・ヴェーバー研究総括』では、同じく「ごく当たり前のこと」が無視される事態として、④ ヴェーバーの有名な短篇は、「屋上屋を架す」かのように、別人による第二次訳、第三次訳、……が、先訳の誤訳や不適訳にかんする議論は抜きに、いわば「自己目的」として、つぎつぎに刊行され、初訳の労苦が闇に葬られる、という奇怪な慣行を、類型的な問題のひとつとして挙示しました。

しかし、貴兄は今回、そういう否定的批判の核心に潜む肯定的心意を汲み取って、マックス・ヴェーバーの未邦訳の大著『中世合名・合資会社史』の初訳という難題に取り組み、「オープンな議論による訳文の改善、したがって学問の原則的・漸進的進歩」への軌道を敷き、その種の議論を基軸とする「開かれた研究者コミュニティ」の実現－展開に向けて、IT技術も十全に活かそうとする、第一歩を踏み出してくださったのです。

小生もかつて、「客観性論文」の邦訳を手がけたさい、戦前の初訳『社会科学方法論』の実績と栄誉を保存すべく、「補訳者」に止まるとともに、訳文については、増刷のつど、巻末に「第 n 刷への

あとがき」欄を設けて、訳文内容にかんするその間の疑問と批判に、漸次、内容的に応答してきました。ところが、版元岩波書店の文庫編集者は、第七冊目で「音を上げ」、「あと一回かぎりで終わりにしてほしい」と申し入れてきたのです。学術出版に携わりながら、「学問、学術論文、したがってその翻訳に、およそ『完結』がありうるのか」という原理・原則上の問題には「思いがおよばない」風情でした。そこで小生、「これでは議論しても始まらない」と観念し、つい放り出してしまったのです。詳しくは、『マックス・ヴェーバー研究総括』の当該節(§. 29)をご参照ください。

*

ところで、「旧稿」の「宗教社会学」章には、ご承知のとおり、武藤一雄・菌田宗人・菌田坦の三氏による先訳、しかも初訳(1976年、創文社刊)があります。

創文社は、良心的な出版社で、『経済と社会』の全訳刊行を企画し、着々と実行に移していました。ところが、(その良心性があるいは負担過重の一因ともなったのでしょうか)、思いがけず、2016年に、事業を終結してしまったのです。そのさい、創文社に寄せた、社風と労苦への謝辞を、「創文社刊・ヴェーバー『経済と社会』邦訳をめぐる半世紀——創文社の事業終結に思う」と題して、HPの2016年8月2日付け「記録と隨想4」に収録しました。

さて、武藤一雄氏他の先訳を総合的に評価しますと、一方では、宗教史上の個別の諸事象について、おびただしい訳注を施し、読者の理解を助ける、良心的な力作でした。その面にかぎっては、いまなお読むに値します。その本文や訳注に「たんに手を加えるだけ」の第二次訳は、「屋上屋を架する」だけです。

ところが、その意味では優れた力作も、「ヴェーバー宗教社会学」の翻訳としては「体を成さない」とうほかはありません。訳者

の三氏には、「ヴェーバー社会学とは何であるか」「宗教史学他の連字符文化諸史学と、どういう論理的・方法論的関係にあるのか」が分かっていません。邦訳の底本が、ヨハンネス・ヴィンケルマン編の第四版（1956年刊）で、これは、マリアンネ・ヴェーバー編初版（1925年）の「意図せざる誤導」を、そのまま踏襲した誤編纂本でした。初版の編纂者は、原著者マックス・ヴェーバーの注記を読み落として、「旧稿」と「改訂稿」とを逆転配置し、「改訂後の基礎範疇と基礎諸概念」で「改訂前の歴史的・具象的叙述」を読む

「逆立ち」を読者に強いたのです。そういう二代の誤編纂を疑問とせず、そのまま忠実に訳したのですから、どれほどドイツ語に堪能で、宗教史上の個別諸事象には通じでいても、ヴェーバーの「宗教社会学」章を、ヴェーバー本来の基礎範疇と基礎諸概念に即して

「整合合理的に」読解し、邦訳するのは不可能で、望むべくもなかつたわけです。じっさい、邦訳文は、基礎概念を表示する術語も、普通名詞と同じように扱って、熟考を凝らしはするのですが、そのときどきのコンテクストに引きずられて、たとえば

Vergesellschaftung に「利益社会化（ときには共同体化）」、*Stadtgemeinde* に「都市教団」という訳語を当てる、といった具合で、読者を、同じ混乱に引き入れ、読解を妨げています。

そこで、こういう（積極的と否定的）二義的な読解状況に直面した後進一後輩には、そういう先訳に、原則としてどう対応すべきか、という、翻訳の「哲学」ないし「責任倫理」の問題が、提起されざるをえません。そして、この問題提起にたいしては、一方では、武藤氏他訳の、宗教史上の諸事象にかんする豊富な訳注は尊重し、保存しつつも、他方では、全篇にわたる術語の誤訳一不適訳は逐一摘出し、是正して、ヴェーバー「宗教社会学」とは何であるかを、そのつど具体的に解説して、読者の理解に資する、という方針が定立されましょう。

としますと、ここに添付した小生の訳稿は、この方針を文字どおり「宗教社会学」章の全篇に適用して、当該章の的確な読解を促すと同時に、それを最適例として、「旧稿」全篇の体系的構成を見通す一助たらんとするものです。その意味で、（いまでも古書として入手可能な）先訳—初訳と、（誰もが「オープン翻訳」上で参照できるようになる）この客員訳稿とを、読者が「相互補完的」「相互媒介的」に読解して、この「宗教社会学」章、ひいては「旧稿」全篇の的確な読解と体系的再構成に到達する一助ともなりましょう。さらに、『宗教社会学論集』に収録されている「世界宗教の経済倫理」三部作の「歴史社会学的」総合、ならびにその限界点にも達して、そこから独自の展開に移るよすがともなれば、そのかぎりで、初訳の労苦も実ろうか、と祈念されましょう。

*

ちなみに、「旧稿」中の『支配の社会学』『都市の類型学』『法社会学』、また「改訂稿」中の『支配の諸類型』などの、達意の邦訳を手がけられ、最大の寄与をなし遂げられたのは、なんといっても世良晃志郎氏でした。しかし、流石の氏も、この基礎範疇—基礎諸概念における齟齬の問題にかけては、ドイツにおける『全集版』にいたるまでの誤編纂に欺かれて、氏らしい明晰と批判には到達されませんでした。亡くなる直前に、初めて、「知的誠実」をもって「旧稿」全篇の改訳と体系的再構成を要望されるにいたりました。この事情は、拙著『日独ヴェーバー論争——『経済と社会』「旧稿」全篇の読解による比較歴史社会学の再構成に向けて』(1913年、未來社刊) の「あとがき」(pp. 305-06) で、取り上げたとおりです。

*

また、こういう事態に直面して「事柄がなにも日本だけの問題ではない」と分かってきますと、「およそ『西欧の近代』とは何だったのか、『禁欲的合理主義』というその『禁欲』は、何によって、どう支えられていたのか、現状はどうか」と問い合わせざるをえません。そして、あるアーティストが、教会の天井の奥、はるか会衆の目には止まらない片隅に、「神は見ておられる」という確信のもとに、精根こめて絵画を描ききった、というようなエピソードと同時に、そういう信仰一心意ゆえに、当初には確かに、目に見える成果が（「救済の認識根拠」として）生まれたにちがいないとしても、まさにそれゆえ、成果への執着=「現実根拠への転移」もつなり、これが「仇となって」、当初の心意には「墓穴が掘られ」、「枝葉が繁って根が枯れる」という「逆説」的事態の進展も、思い起こされましょう。そしてさらに、そういう逆説的衰退がまさに全面展開されようとしている世界史の局面で、日本が「欧米近代の脅威」に曝され、「敵に似せて己を造る」ほかはなく、今日にいたっている、という想念にも、誘われましょう。

*

さて、このように考え、語ってきますと、貴兄には、「そんなことなら、小生が貴兄の先例に倣い、小生自身の HP に『オープン翻訳』の欄を増設し、タイ・アップして、ことを進めればよいではないか、それで済む話ではないか」と思われるかもしれません。それはそのとおりなのですが、じつはそうはいかない事情もあって、貴兄の「軒を借りよう」という話にもなってきたのです。

というのは、こうです。今回の第二総括書の脱稿が遅延を余儀なくされた最大の原因是、パソコン入力体制の攪乱と途絶にありました。昨 2021 年の夏頃から、「デル」のファックスがひっきりなしに入り、「マイクロソフト社がやがてウインドウズ 11 にヴァージ

ヨン・アップして、10 の保守サービスを停止するから、『大切なデータを危険に曝さないように』、パソコンを買い換えてはどうか」と執拗に勧めてきました。11月になると、小生宅の二台のパソコンが、符牒を合わせるかのように、「ガーガー、シャシャー」と騒音を発し、画面も乱れて、不具合をきたすようになりました。すぐにシャットダウンしたり、再起動をかけたりしますと、不思議なことに復旧するのですが、これでは『もう長くはなかろう、脱稿以前に入力不能』になつたら困る』と思い込んで、デルから一台、(それでは以前の『オフィス』がインストールできないので、仕方なく)富士通の FMV を一台、買い求めたのです。もっとよく調べてからにすればよかつたのですが、ウインドウズ 11 では、初期設定など、すっかり様変わりしていました。これまで富士通の「親指シフト・キーボード」を用い、指に入力方式を覚えさせ、効率も使い勝手もよく、快適に執筆を進めてきていたのですが、今回はウインドウズ 11 が「親指シフト・キーボード」に対応しないばかりか、版元の富士通ソフトも「Japanist 2013」の販売を終了し、撤退してしまっていました。その他、プリンターにしても、以前には USB プラグをジャックに差し込めば、ドライバーは自動的に起動しましたが、今回は初期設定が必要というのですが、「トリセツ」を読んでも、カタカナまじりの変な日本語で、要領をえません。こういう「文化」に付き合っていくのは消耗するばかりだ、と覚悟を決め、「ウインドウズ 10 のままで、使い切れるところまでは行こう」と旧体制に復帰しました。すると、不思議にも、復旧して、いまのところ、支障をきたしてはいません。しかし、いつまた、一方的な通告によって理不尽な混乱に陥れられない、ともかぎらず、ここはひとつ、今回もまた、貴兄の技術力に頼ろう、と思いなした次第です。

*

「宗教社会学」章邦訳への内容上の疑問、批判には、小生があとしばらく、対応できそうです。そのあとは、貴兄に引き継いでいただき、やがては貴兄にも、後継者の選定に、意を用いていただくことになりましょうか。

以上です。長くなりましたが、趣旨をご検討くださり、「宗教社会学」客員寄稿の掲載方、よろしくお願ひいたします。

敬具

2022年6月23日

折原 浩